反古會

158
121

158-121
1200800084097

158
121

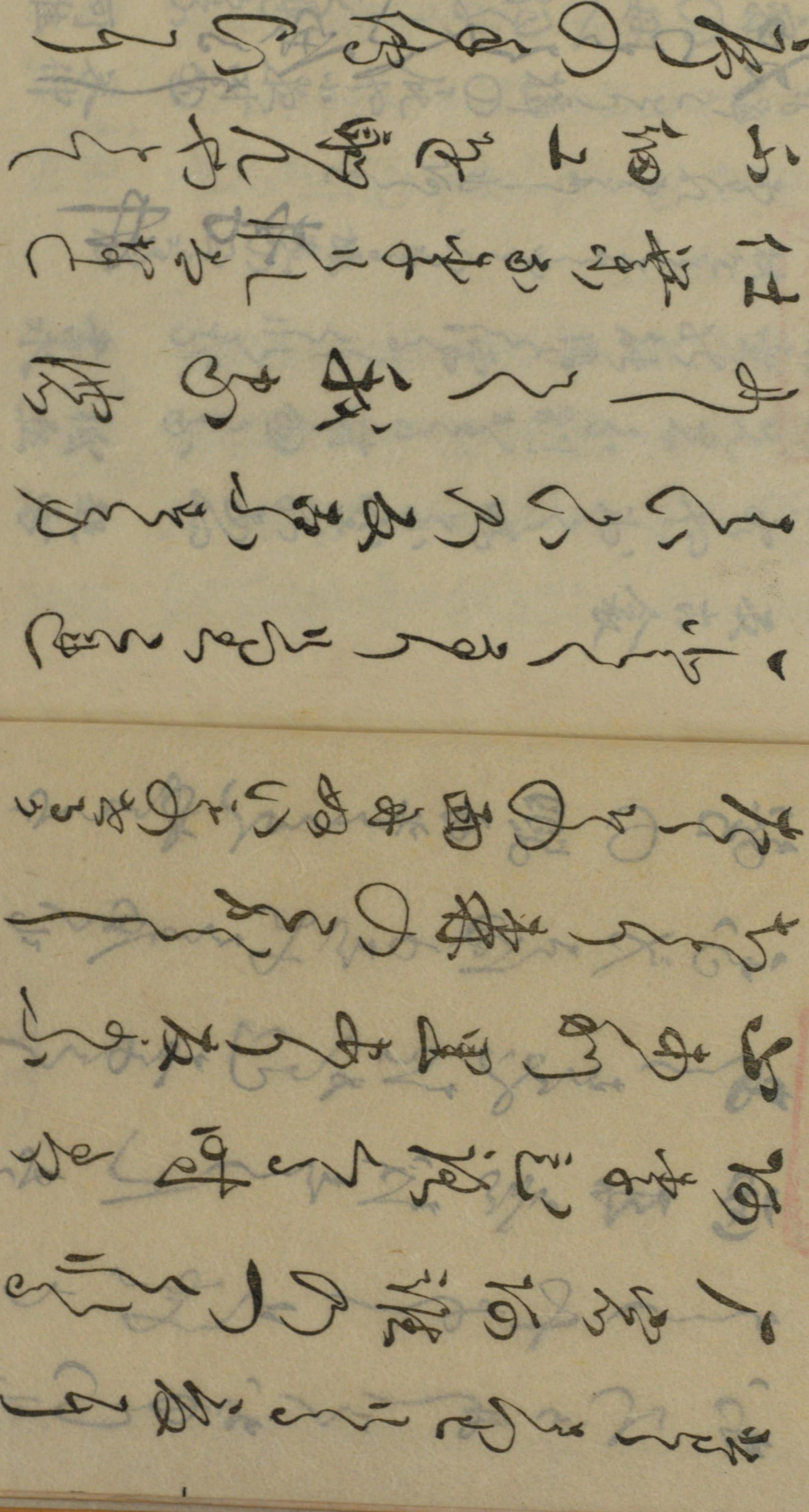
反古衾

阿誰撰

帝國圖書館藏

磐の廻あさましぬるゝ
ゆかりとかはる風も
あらしをいたみ
西東高ばきしん
うゝやまとと
おろかみ

大正
14. 3. 14
内交



加つらんん屋ふ

李井

反古會

初雪や水汲ふ時ふ空ゆあり　超雪

[illegible]先雪ふ別かるる時面うふ　祇丞

紫雲英ゆ鶏田ふ濡るる小雨　書永

枕をそそそそ少しいるる旅あのふるるん

あるれるるるみ　もひうと

おも梅とそう梅の屁や小春時面　米仲

猪森の母へ何ふしそそふ　阿誰

帝国図書館蔵

出しらし猫の瞳(ヒトミ)もかくれく　旨原

せもらす月日ぞとのふ時雨かな　嘉廷

初時雨咲くや富士の裾くり　浙江（伊予国男）

夜話の時

嵐烏の声もふる音あるとふ小夜時雨　春水（伊予国女）

月ちるまと湯音聴しく小夜時雨　満津女

青鳥も町屋もうせく時雨ふる　旨原

あるく〻行く夜時雨るや馬の数　渭北

雪のあしたハさぶもいとすし

しるべ舟や情さ鳥も濡羽いろ　多代女（伊予国妻）

鶏の足ふく物かく時雨う那　湖十

雲宕

止さ情ふ時雨の坂や五十町　存義

伊予国の人と賀話ゐ乃ふ時

手数白出雲ふく沖の船　旨原

四位物空ていと爽やかなるのれ賀　第五

うかまし越せ蓮の会山なみ多ふる　釈　蕪村

汐風越してとと名

出洲へ江戸くさ高ア天ふる哉　浙江

玉川ゆ祇ゝ如きものゆふる哉　再賀

枝川の枝まゝ伝ふちりうゆふ　木啓

樽ゝうの寂る小夜ふ夜ふる　音原

枯野東小町ゆ似ゝ乞食哉　書水

ゝも色ゆ枯野ゝ如　縄麓　平砂

ものゆ墓（ツリ）低の高ゝも遍野哉　昔原

猪の寂不拾ゝ小ゝ野ゝ哉　由林

旅行の吟

風や富士と居並ぶ峯のち　阿雄

野渡の夕日

ゝかゝゝや赤合成ゝ人の新　満津女

風の笛うもきうと横ぶうう　音原
達きうと枕おくくもと蕎麦ふ　阿雑
皆蕎麦ふ粉ぬきうぬ猪ふ　濃北
世代門とうもこの空る蕎麦ふ　阿雑
名も知らぬ男木の蕎麦おくなる　浙江
横ぶ這ふ蟹の首、ひうく蕎麦ふ　肥後
古池あきうるまく蕎麦ふる　珠来

古寺の句

塔くるもこ二月ともくもと蕎麦ふ　存義
蕎麦ふくく幾日ぬるぬ移口堂　同
伐ぬ苔ぬ木ぬ虎の蕎麦ふ　蕪村
埋る家の渠もあるぬ溝蕎麦　常仙
十月の猪おくくぬ木の蕎麦　湖十
一寸も動ぬ無ぬ蕎麦ふ　洟十

城僻ミヲ門閉ルテ晩シ

静さも京花の塚ぬしは　旨原

いろ〳〵み鳥ぬれ居るぬしは　同

そ川や鳥のさゝを舟の内　同

そ山や菊ぬろけるる滝の音　何誰

聖ハ人み踊ぬ〳〵ぬしは　買明

飯時ぬ〳〵みゆやそうぬ　由林

家みへの酒及あるとるぬ　存義

家鶏も火着み似うそうぬ　有佐

埋火やぬ〳〵ぬ孫ぬ〳〵ぬ　言葉　平砂

埋火や物ぬ母ぬ〳〵み着ぬ　再賀

埋火の杉母ろみ酒の白ぬ　何誰

隠士ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ

菊ぬ花ぬみちぬ〳〵ぬ　紀義　旨原

四布五布ぬのかぬ〳〵ぬの蒲団ぬ　存義

う使〳〵ぬ蒲ぬ代ぬ〳〵ぬ　庭臺

蒲ぬ家ぬ人ぬ巨燈の蒲団ぬ　何誰

思ふまと我のみ思ふ紙ぶくろ　存義
埋木のいうち芽いん梅をぶ　吉原
松風をこゆるみかぜぶくろ　湖十
さくらぶくろ坂ぶ見るぶ帰子ぶ　春来
よいぶくろ買ぶく戻るよ坂所中　清泉

頃廓

新色出ぶ所中文見知ぶう　吉原
大黒ぶ恵比寿頃ぶかぶる所中ぶ　同

かく老ぶく醜ぶ新ぶる所中ぶ　存義
お髪ぶ四地黒ぶ所中　茅立
口切ぶ音しぶ面倒ぶ小ぶぶ紀　春来
口切ぶ方ぶ赤ぶ知者福者　茅立
口切ぶ地赤ぶいつの雅ぶ　由林
炭取ぶ溜ぶる松斗の歌ぶ　何逢
ぶぶぶぶる我ぶぶぶぶの月　吉原
京ぶ人をかくぶ知ぶ月　同

南車み惟光えからうを自表　秀億

冬至

風の例ゝ似て新年の芽ぶ　存義

諸宣雲寺

一箇半身無雙眼とあるゆゑ無を

達磨和尚聊ゝ思ひ付く　美立

てゝ月ぬけてゝ入てゝ

表白ゆへ也もとゝあゝ

自然ゝとゝゝも花るゝ世ゝ　吉原

空梅和尚みゝ花ゝ咲ゝ　多代安

初雪和尚寒ゝ咲ゝ　鳳宿

羇旅

川越ゝ渡ゝ舟の底　珠来

渡ゝ去ゝ船ゝ雨ゝ笠の色　春来

ゝ僧の咲ゝ水ゝ飛ゝ笠ゝ　何逢

八橋の名不ゝ寺ゝ

四方枯くさみ　梅鴨の首　木啓

鴨飛やをくれ　おくれ　あのゐ　春來

おもをたるるものゝ姫をむかへ

ふるひみいさう話のおもむきを作る

別あるく雁ふ犯鴨の夫婦ふ　仙誰

磬や下ゝ形ふ　ふみ八ふのいい　存義

ふゐふみ孤ふ法いく　寂如　ふふ　犯逸

川舟みたふの百磬形ふ　ふふ　巽蘿

名所のふゐ

浮ふやをふの池の犬ふふこと　旨原

又ふみ戻るもふ和一初水　超雪

新元中四一雪ふ鞍こ書鶏　溯十

髮亞襟若常解ふく活魚の

法華詩みを吉ふるふ

第九の十五の治部通みふふ　采仲

裙（ウチキ）みを拾あふきかふ

絵ものがたりと思ひ合せ流の古墳

あらく今世の秋ふかきことを

詩歌ものがたりの板碁盤をて　吉原

題名

あのかのうらあるまうる　阿誰

瞰（ミテ）ゝ飯盛山家うる　吉原

賀新宅

色相蒼波音ハおとあらく家外　同

空会仏刹ゝ世昔外巳ゝ門　吉原

変といふ極楽ハ何ゝ空仏　存義

あ神ハ上へ弓ゝ牡丹　紀逸

うかゝ出ゝ藻外埋きあゝる生海嵐外　何逸

北風の砂外ゝ紀生海嵐ゝる　樓川

天空ゝ蒲空かゝ生海嵐外　清泉

外嵐ハ生海嵐外てあゝ海生　秀億

魚外西施乳あゝ魚外魚ゝあゝ

不依人依經と伝ふるなるべし不依形

依味とさとるべしと

肥えたる人は脂ぬけよ鰒のうすづくも　第五

ゆるるまれ鰒とあるまで取まくる　雞口

一抵疑了　一抵疑

鰒汁の形燈　壹原

新酒味といふべし不思議

晩の鐘　沖の音　同

懐の子みな法師　伊達

いさ立よりて

炭賣や名もつまるとかゝる山　壹原

炭燒の蹴の竈くゝ出り　同

炭燒や己れかゝ乃屠煙り　再笑

初雪や鳥の足あとの新　春來

さつ雪やいまゝ枯葉みたまぬうち　伊達

無と先日めり　雪外　存義

初雪みゆるてるみそらの色　吉原

川の雪村雨かな梢の外　清泉

雪ふりつもるかなしいかぬ海のいろ　巽蘿

戸ハ内へそつまてく雪の薄光　渭北

橋もそ形雪みあてめ氣色哉　第五

そつ雪の市先キ揃ひ合羽ゆく　采仲

画賛　佐野のうら

雪ふり指ゑ雪みおろんてえぬるり　吉原

夢代表の鼻唄せあてく雪の人　秀億

降まれ雪ハ雪ハ雪とるまし麦畑　木啓

雪降てそ雪ハ誘ひ浮世うの外　買明

くるくるくる休のめてくる寺雪哉　平砂

雪かくとくとくとくとくと雪の中深き　浙江

徒文の系うの系柏漫の

云大郎みるりてく

雪の跡ちらちら人を牝うの　珠木

来る春は共向みんとす屠蘇　満寿
蝶掃の嵐み迎えくるうき　蓼代女
山名みちは上やとくの蕾　買明
猫衾の唄を枝四師走　栖鶴

いつもとはちがうたれてゐるあるる
あくるあるにあるのうるうる
遊人の寝ぬおもひ成ふ事　阿誰
箒みまつむ松ら枝書宮　李井
玉琴妙柱の　百萬
猫のうるうる枕あく　雅
十日うう蒔うううの月　井
艇子めてく柔れ椀をもす　蓼

懷かしき人の肌の香

誰

伏見の船の似る恋を沙

井

麻の衣婦の腰にまとまるる

美

元日に陶酔とつきる紀

逢

うち寄せ板屋の面れ古貴揖

井

鬢の雪をゆるし非垣

美

若草の若葉の流れあり

誰

心の花手連歌して生る

井

乃北の夏蔭を南つる竹筋

美

女郎花乃掃く塵をなし

誰

尺八の音も少へしつて山

井

謝て茶の湯三昧の月

美

盃の赤き赤の赤の赤色

萬立

碁の手おかきて焼る秋

井

雪板の若倉家の乃湯

誰

妻をひとり傾城て盃

立

同じ所にて

井筒に彩色或ときまつと　誰

綿のやうにあれども菅原京にて町　井

乙異を箱に辻の舞く　美

うちかつうちうに割竹にて友を釈　立

むくと起るに紙いろう　井

月宮に老人のねうん　誰

乞食をぬきて踊りの蕃　立

門トの所にて留りと面白き色　美

むかしとは弱の眼乃色　誰

夢ゆさへ本当に旅疲れて　井

笠に記念をやうに小吉郎　美

手例に馬乙体乙る花の作　立

賢く立て嘸みさまます　井

阿誰　十句
李井　十一句
百萬　十句
萬立　五句

獨垂外物牽

来かゝりの象伏へ来る雁間うゝ　雁宕
傳子形宛みを人の目　百萬
鶯土圭閑も靜みを越ゝ　萬立
而なゝしの陰の陰演　阿誰
起ゝ出ゝ如ゝ蹈の月形秋　李井
雲ゝと思ふ溫飩屋の湯象　宕

茅屋くさの神の菅かへる　為

旅へも時行る袖の卜巫　立

きりすあるさ蓋あけもぬ玉柳　誰

刈深も湯かくと五尺寄る雪　井

羽六の猪貫代例く書もる　宕

屋代あしやもある正成　為

人の秋東山子舌の深見と　立

鮭突くきと月のさ雲　宕

も代夜も掘灯えへ男山家ゆて　井

仏取くさ迄くと為清ん　誰

花吉乃時代人の指い来る　為

蔦黄ゆ阿ゥ思杉の雪の葉　宕

吉凡ゆ供吉ゆ老懸えるかへ　誰

並居る中ゆ経知ゆ僧　井

早魃ゆ桶くこ何と祝の面　立

底く草鞋を作るお川　為

雲場の酒殿みを築殿いめ[illegible]さ　宮

池捜の菊の花中みを遠く出事　淫

傾城みを嬢[illegible]くも麝を意る　井

下を[illegible]源氏ハ式部眼をん　宮

梶の葉に鍬細工の帝の也　菊

月を[illegible]く庵みを敲く友　立

秋の山帯みを[illegible]庵を思ひ出る　淫

五位に[illegible]く剛く菊を[illegible]の茸　井

我鼻の低き[illegible]遥みとよ[illegible]く　立

雨をさ[illegible]と痛いを引　菊

餅搗も[illegible]く面[illegible]　淫

を[illegible]ゆく振袖に嘆　宮

傘みを弱いめの炎の嵐　井

加[illegible]の[illegible]みを[illegible]を[illegible]と屈く　立

雁宕　八句
百萬　七句
美立　七句
伊雄　七句
李井　七句

沖さ月ちゝ色の比おい下野の國み
雅行して奉行物ゝいへる
古木の新み

同前の景色
ト如ちゝ色
物ちゝ清水ゝ石ところゝ　蕪村
馬上の客さ詩み吼る月　李井
菜畑を夢ゝ通る遠出み　百萬
ざゝ見ゝ紙屋の鯖（コノシロ）　村
大河ゝ見ゝ弦ゝ庭の西　井
枕ゝいゝ川ゝて起ゝ邪鄙　美

飯炊へ出ぬ土瓶の中も冬ゐて　芋

陳皮一味み茶研おろし　井

冬の月て拭ふ洞のうるのう　仝

犯〻蓬を伴ひ埋り　芋

萩ちる犯鬼の培み色そろさ　仝

休憩つい〻楽〻の秋　井

釜の空みやつを焼て炉の月　仝

酒〻物〻も旅のうるさ　芋

三条川ちこみ流ふ流る　仝

花ちる〻ぬ色迷の蛇　井

山吹み莚下ケふ刷の戸　仝

清き〻〻淡乃ゐ蛍春　芋

橋ちる人形賣を古風うり　井

塚〻ちる塔へ姫〻女大名　阿誰

清ちゐ十日ゐ野〻きゐみ　芋

唐猫酒をすき深の尼　井

松風を吹ふる世はゆゝしき形り　誼
面こをかゝつゝ掛乞みをふ　為
酒毒とて市盒にゝみ出来より　井
眠るゝるひみ祈かいしれ　誼
夕蝉みち間ゝ糸とる業庇　為
注かて意ゝ説経　井
月新色横ゝもおのふ仇まゝ　誼
澄のゝゝみ第式肯負ゝ　仝

乃国新式境乃岩ゆゝ　為
無折業ゝ堂禅ゝる僧　井
利刀み反古吠みの字の詰身ゝ　誼
波も俗ゝる海風の形物　為
芝居乃色花ゝ云　面のいま　井
小船を漕ゝぬゝみ事新　誼

蕪村　二句
李井　十四句
百萬　十三句
阿誰　七句

漁泊

夕やけの伝説魚をあぶりけり　百萬
大根ぬく舟人来る浦　蕪村
二十年酒うる家をたづねあて　李井
胡蝶ゑみ似たり園の犬　蕪
杖つくみ柳未黄り春の月　村
也かうとさ川の小影　井

神某城脇に黒みのゝ神ゝ　茅

余つとめの子丞の益人　村

松風と不二ゝ雲と甲斐嶺　井

神書を出く　茅

る鹿毛の馬の駒もとめ　村

しまする市みに捧も侍ふ　井

雪隠みエへこの春もかゝる里　茅

乾のゝゝ浮ふゝゝ　村

ゝゝ鳴く女房達と連れみ　井

月の出ゝ乃鹿もを焼く　茅

泥とも塔婆ゝる花ゝゝ　井

ゝゝ待ゝる川崎の温泉（テユ）　茅

二

ゝ指み侍連いゝ先ゝ大神宗　仝

草のゝ色丹豆腐売る門　井

行燈のゝゝと闇を五月雨　仝

支記一冊ゝ書ゝ　茅

たゝうらぬ蘭解の碁盤言絶て　芋

我国の世を建て古寺　井

五六里ハおくゝさへる紀伊の濱　仝

眉みたゝ頃城の旅　芋

端面ハ角ハたゝうる類かな　仝

お清の高みを珠数廊　井

浮もうい喧ぶ月のたゝ元　仝

そ瓜たうも姉のへる舟　芋

仲みゆく孫の沙色高くなる　仝

紀の路みゆ減る山伏の杖　井

藤生まゝ直ぐ立ち詠く乙門　芋

一雲弱みゆ起る獅焚　井

かゝゝ和ゝ嵐わけぬ花の春　芋

扇子投ゆ心礼ゝき　何誰

百萬　十六句
蕪村　五句
李井　十四句
阿誰　一句

むかし或翁すみし山の夜かたり
まらうど女の名をたづね
花の森見えをなつかしれると

みん市も又宮柱の陰にみ
この袖をあをしろく
前うしろ河り火桶の様ころ　李井
家の路中にかし新折釘　百萬
古池に橘売京にすみさん　蕪村
ものゝ始ふする日ある藤の庵　井
鴛鼻に袖す新も落月秋　萬
問屋荒中の掛金に菊　村

行秋の足袋の白さも初しぐ　井

ふるさと浦の一すじの秋の道　芳

唐人の袖ふる山てせかるる秋の風　井

旭の外ゆもるる秋　芳

薄板の空ふる濱名もこもれる　井

雪おろし帽子をかぶる　芳

そそぐ中吉次の同見金そう　仝

四ちの子肩をも張く掃板　井

春の夢赤前垂の膝まくり　仝

新綿おろす信濃の信因書やる　芳

惜さの寺もうるさきう　仝

蕨をくぐる引の犬　井

擂出す蛸乃天窓ぬかるる　芳

祝ふ事の傘ふる礼　井

振袖を抱く男のよろこと　芳

ちぬ　きぬの酒　井

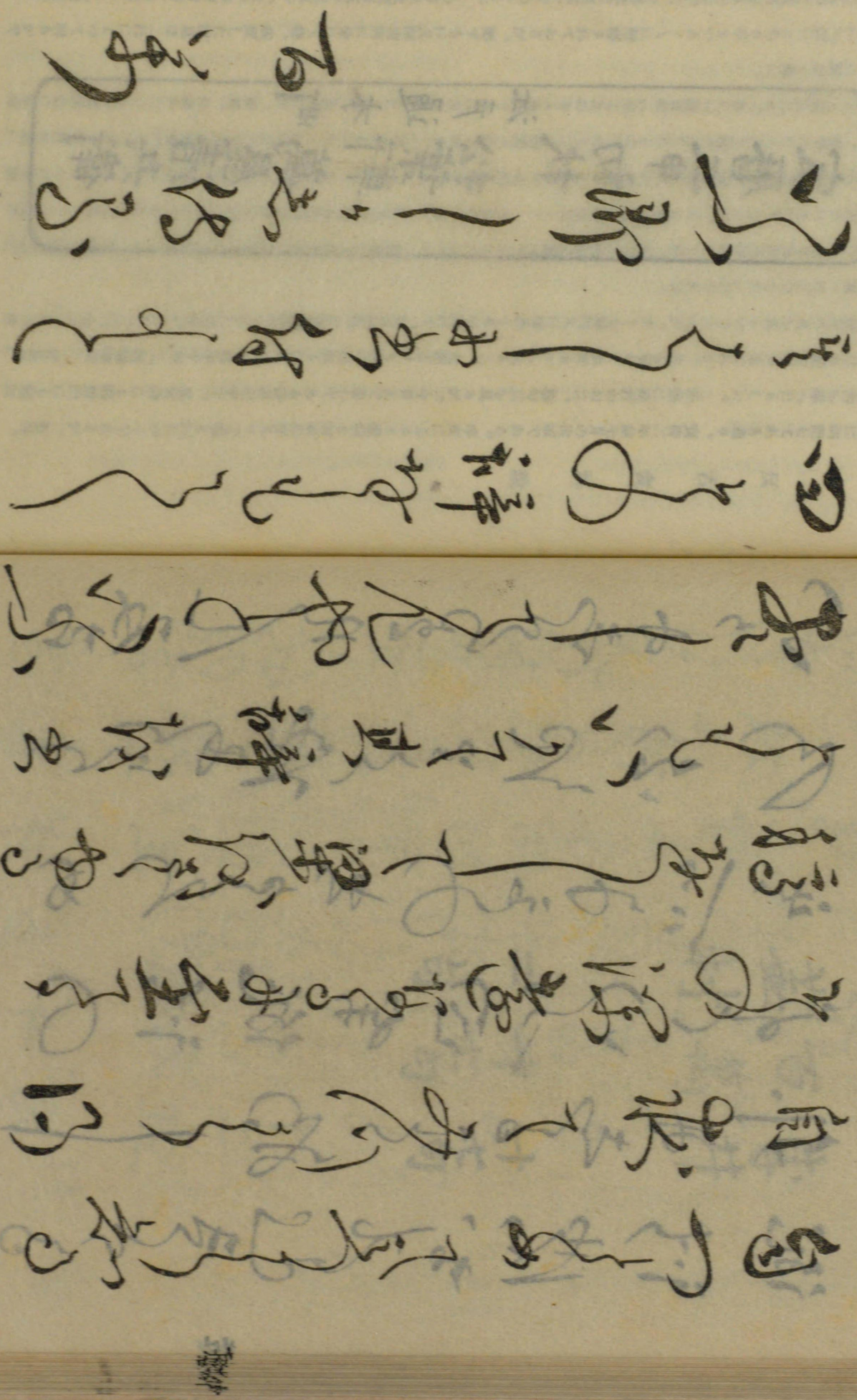
白菊とぜうも燒も利とうて　芋
ちりぬ　ミテみ耳こ高ぎる　井
ヲホソラ
虛空を天物と来めるまいろ　芋
木の葉ふ音しよ書結の塔　井
畜肉の鐵取うみかに消へて　仝
蝶ゑみへつて朝を養ぎる　芋
文葉ふ色う笑ろふふの月　仝
寺ぶ鶏鳴もいつとの色　井

ウ

蟹を煙を見する秋の音　仝
彼し情よみなくて有る不二　芋
蝶婦みを溜切る古臭さ　井
ごつちゃみ笑ふ乳母子　芋
沈まへ三百之の系ぎ若　井
張まして寄る十二盃　芋

李井　十七句
百萬　十七句
蕪村　二句

いつみきつるれん及吉
乃法眼ありけり
生死のきわめ
よりいかに四条俤世の
外みきるるあはれ
俤世俤おもひきる



宝暦二申初秋　江戸通本町
松葉軒萬屋清兵衛

反古衾解説

この書は奥附に明記してある通り、寶暦二年秋七月の出板である。序文によると雁宕と阿誰の肝入りで編まれたやうであるが、百萬、李井なども共に力を添へたらしい。この集に蕪村の句二、聯句三を見るが、今日まで傳つてゐる俳書の中で、史實的にも藝術的にも蕪村の面目を窺ふに足る最古の句集である。尤も單なる史實上から見ると、此書よりも前に出版された、「双林寺千句」「四海春秋」「百歌仙」等二三の俳書に蕪村の名を見るのであるが、少くも同門又は同志と名を列れて、其の製作の發表記念とした意味から言へば、先づこの「反古衾」を第一に數へねばならないのである。

寛保二年六月其の師早野巴人が歿した後、蕪村は結城の雁宕などをたよつて、關東から奥羽邊を漂浪してゐたことは、其著、「新花摘」によつて略ぼ推知されるのであるが、同じ寶暦二年の京都――「双林寺千句」は京都で松永貞德の百年忌を營んだ時の紀念集――と江戸の出板に其名を見るところから、同年頃の蕪村の所在が一つの疑問となつてゐる。併し「反古衾」の聯句が、蕪村の加つてゐるのは皆前半にとゞまつて、後半はあとから繼ぎ足したものであるとも想像されるから、「双林寺千句」に現はれてゐる事實によつて、蕪村は既に京都に出てゐたとも思はれる。併し一度京都に來て其のまゝ永住するに至つたかどうか、當時江戸、京都、丹後あたりを一所不住に往來してゐたか遽かに斷定し難い。

蕪村の肩書きに「釋」とあるのもいろ〳〵に解釋されてゐるが、要するに其師宋阿に分れて後、薙髪した消息はこれによつて明らかである。特に佛門に入つて僧侶となつた、といふ意味ではないであらう。この書以後寶暦五年出版の「夜半亭發句帖」の跋にも「釋蕪村」と書いてゐるのを見ると、いつ薙髪したのかは判然しないが、釋を稱してゐた時代は相應に長かつたやうである。尤も寶暦元年京都で出板した「古今短尺帖」の跋に「東都蠶道人蕪村」と署名してゐるのによつて、薙髪したのを其以後即ち寶暦二年と見る説もある。兎も角蕪村の生涯の中最も不明に屬してゐる江戸時代の史實に、この「反古衾」の一卷の存するのは、暗中に炬火を揭ぐるものともいふべく、俳書として史料として重要な位置を占めてゐる。

尙ほこの集によつて阿誰――姓は箱島、名は善兵衛下總關の人――の妻曾代、息浙江、女滿津等一家四人句に遊んだことを明らかにする當時樓川――姓谷口、別號木犀庵、無事庵、天明二年十一月二十九日歿――と妻田女、息雞口と此道に終始したのと好一對といふべきである。

本書は勝峰晋風氏所藏本によつて覆刻した。同氏の厚意を感謝するのである。

終りに誤字を訂正し、且つ難解の字句に註釋を加へて置く。

一　枚

「鬱の翅にたとえ」は「たとへ」が正しい。

「西來意」は「指月錄」に臨濟禪師參黃蘗、問曰如何是祖師西來大意、蘗云庭前柏樹子、とある。

「面にぬいもの」は「ぬひもの」が正しい。

三　枚

「行先の分別かわる」は「かはる」が正しい。

「いかなる旅客の過るならんあわれ」は「あはれ」が正しい。

「栂の屁や」は栂を動かす時の音を形容していふ。

「せわしなき」は「せはしなき」が正しい。

五　枚

「狐のから」蔓草の類にや。

「枕なくれば」は「薙ぐ」「投ぐ」いづれかの意。

「世を何とうわの空」は「うはのそら」が正しい。

六　枚

「塔たをれ」は「たふれ」が正しい。

「伐たをす」は「たふす」が正しい。

「梢おかしや」は「をかしや」が正しい。

七　枚

「埋木にひうちもらはん」俚言集覽に「又紙子」にあり「夏山雜談」紙服に火打と云ものを付る火打袋の形に三角にする故の名なり」とある。

八　枚

「前髪の舊地荒れけり置頭巾」の置頭巾について「芝看」に「お宿老には白髭の神、桃青、おきづきん額にたゝむさゞなみや、似春」の附句がある。

「家原に」古事記にある「いへむら(家群)」の義か、或は「家の中の原」の義か。

「御車に惟光かこつ」源氏物語夕顏の卷に「御車いるべき門はさしたりければ、人して惟光めさせて」云々とある。

「一箇半身無雙眼」は達磨の賛。

「齋につく」は「ときにつく」、「とき」「ひじ」は寺の食事をいふ。

九　枚

「寒梅や冬にかついろ」「かついろ」は「かちいろ」ともいふ。藍の濃き色。こゝにては「勝つ」といふ心をもかけていふか。

「別ありて程よき」、「夫婦有別」の語に因む。

十　枚

「浮鳥やすかたの池の犬はりこ」大和生駒郡筒井村に菅田神社あり、姿の池の側。堀川百首に「おとめ子がすがたの池のはちす葉は心よげにも花さきにけり」水鳥の姿を「犬張子」に見立てゝいふ。

「十五の冶郎涌きにけり」「冶郎」は「やらう」みめよきたはれをいふ。

「袴著や千とせの阪を碁盤にて」古今集に「千早ふる神の切りけんつくからに千年の阪も越ぬべらなり」とある。老い行く年のことをいふ

「入相のかねて」、入相の鐘をかけていふ。

「喩から飯食ひこぼす」、霞の眼近く落つる形容。

十一　枚

「天窓から」あたまから、と讀む。

「身震ば」みぶるひは、と讀む。「酒先生」は酒飲みをいふ。

「魚に西施乳あり草に想思草あり」「格物論」に河豚腹中腰目爲西施乳、橄欖蘆根解其毒」とあり。想思草は相思草ならん。「述異記」に「秦趙間有相思草、狀如石竹、而節節相纏、一名斷腸草、又名愁婦草、亦名霜草」とある。

「一狐疑了一狐疑」禪語。

「新錢座」江戸芝區にあり。

十二　枚

「炭賣りや名も黑主かゝみ山」黑主を神にしたる謠曲「志賀」に「海越に見えてぞ向ふ鏡山」とある。

「兵と先ほめけらし」、謠曲羅生門に「つはものゝ交り頼みある中の酒宴かな」とあり。

「太刀持は雪にころんで見へぬなり」は「見えぬなり」が正しい。

十四　枚

「取得し陶酢とはつれなき」、「陶」は「すゑもの」又は「すがめ」と讀むか。酒ならざりしなくやむなり。

「うちしきる板屋は雨の古骨牌」、謠曲雨月に、時雨の板屋をたゝく音をいとひて、笘を葺きそふる事を作れり、「古かるた」は、其の笘の形を形容していふならん。

「鑿に唾をゆるす」の鑿の字正しからず。唾をゆるす、は神宮建造の大工の所作についていふ。

十五枚

「尺八の名にも聞へし」は「聞えし」が正しい。「いはて山」は「いはて山」が正しい。

「甜て茶に吸む三股の月」は、地名辭書の鐘淵の條下に「木母寺の北なる堆洲の名に呼ばるゝも、元は利根（綾瀬）入間（荒川）の交會にあたりて、深潭の淵を成せしに名づけしに出でたり、又た三俣と呼れたり」とある。

「碁に打ほれて瘧落る秋」、「瘧」の字正しくない。

「塗板に夜食窺ふ」の塗板は料理の品目をかきたる板。

「井筒に影や」伊勢物語に出づ。

「道具を箱に辻の舞々」、まひ〳〵は扇拍子にて舞ふ昔の舞曲。

幸若、大拍の二派あり、又た僧の因果などを說き人を慰むるものを云ふ。

「うちかつく弓に割籠」の「割籠」わりごと讀む、辨當の類。

十六枚

「門トの外しらふと」謠曲東北に「此寺いまだ上東門院の御時、御堂の關白この門前を通り給ひしが、御車の内にて法華經の譬喩品の高らかに讀み給ひしを、式部この門の内にて聞き、かどの外法の車の音きけば我も火宅を出にけるかな」云々とあり。前句「默々の庵」よりこの故事を想ひよせて洒落れたるなり。

「笠に記念をやとす小太郎」謠曲「柏崎」の脇を小太郎といふ。笠を著て出づる其の道行きの文句に「乾しぬべき日影も袖やぬらすらん」とある。

十七枚

「駕土圭」、「土圭」は「とけい」時計の古字。日本書記纂疏に「嚴觀乃引周公測影之法、以一尺二寸土圭、用測日影」云々。駕の乘り心地にて時を計るをいふか。

「旅へも時行る袖の卜巫」、「たびへもはやるそでのうらなひ」と讀む。

「馴染も訪□す」、「なぢみもとはず」。

十八枚

「長き夜も挑灯見へぬ」は「見えぬ」が正しい。

「春風に供奉の老懸ひるかへり」、「老懸」は「おいかけ」と讀む。兩耳の上に扇の形に毛もて飾りつける昔の武將の裝束の一種なり和訓栞、年々隨筆等に詳し。

十九枚

「我鼻の低きを謳にとよまれて」の「謳」の字正しからず。或は「謎」の字か。「どよまれて」は、鳴りさはぐ意。

「傘に弱ハ女の靈の鼠喰ヒ」の「弱ハ女」は「手弱女」の略。傘の鼠に喰はれたるを、女の執念と洒落れしならん。

「神無月はしめの頃ほい」は「頃ほひ」が正しい。

二十枚

「茶坊主を貰ふて」、は「貰うて」が正しい。

「陳皮一味に」、「ちんぴいちみに」ちんぴは密柑の皮を干した藥味。

「萩すゝき鯉の培（コエ）に」、「はぎすゝきひしこのこえに」

二十一枚

「三途川たはこに醉ふて」、は「醉うて」が正しい。

「眠るうなひ」は「うなゐ」が正しい。

「月影を襖ともおもふ」、「襖」かつぎ、と讀む。宇林に「襖褙小被也」とある。

二十二枚

「道閉る戎境の」、「みちとづるゑびすざかひの」と讀む。

二十三枚

「鉢米を臍土器に」の「臍土器」へそかはらけ、と讀む。貞丈雜記に「土器品々の事、小さきをこちうへそ（中略）前にいふへそかはらけの事を小ぢうと云ふは、三度入の内に重ぬる小き土器なる故なり、三度入は盃に用ふるかはらけなり、酒は盃に三度づゝ入る故盃になる土器を三ど入といふ」云々。

二十四枚

「ましら鳴く女房達」、女の甲高い聲を形容して「ましら鳴く」といふか。

「池上の塔」いけがみは日蓮示寂の地。本門寺あり。武藏荏原郡池上村。

「川崎」は武藏橘樹郡、大師堂にて聞ゆ。

「常うたぬ薛の碁盤」の「薛」は「ところ」野生蔓草の一、恐らく「槲」の誤字か。

「五六里はおこしさへなき」の「おこし」は「お輿」。

「お講の霜に並ふ珠數鄽」、お講は報恩講のこと、眞宗の祖眞鸞

158
121

の法會。「珠數鄒」はじゆずみせ。

「冬瓜ばかりも脚の入る舟」脚の字正しくない。

二十五枚

「紀の路にへらす山伏の杖」大和大峰山より峰入りする行者の紀の路の末になつて、杖に用のなくなる意。

「かまばねば鼠あたけぬ」の「あだけ」は戯れ騒ぐ意。

二十六枚

「そこらちう吉次か目見」の「吉次」は三條の吉次、「義經記」に「三條に大福長者あり其名を吉次信高とぞ申しける、毎年奥州に下る金商人」云々。

「やはり肩をも敲く檢校」の「やはり」は「やはら〳〵」などいふ柔の意。

二十七枚

「信田妻」芝居にも仕組まれた狐の故事。

「惜そうに」は「惜さうに」が正しい。

「薪をくらふて」は「くらうて」が正しい。薪にて打たれる意。

「蛸の天窓の嵩からす」蛸の口にある軟骨を「とびからす」といふ。

「ねりは手傘で」お練りをいふ。

「白菊とぜうもう炷も利とりて」の「白菊」は香の名、「ぜうもう」は燒亡の意か、みだらに火桶などに焚きくべる香をいふか。「利とりて」は「きゝとりて」。

「忘れしシテ」の「シテ」は能樂の主役の「して」。しての絶句したる場合の耳こすり。

「虚空を天狗」謠曲「花月」にあり。

「かき消へて」は「かききえて」が正しい。

「文蠶に是がならふか」は「ならうか」が正しい。

二十八枚

「彌生でしいる十二盃」は「やよひでしふる」が正しい。「十二盃」は「じふにさかづき」と讀むか。

二十九枚

「深遠なるに至て□」は「至ては」なるべし。

「梁をさゝゆる」は「さゝふる」が正しい。

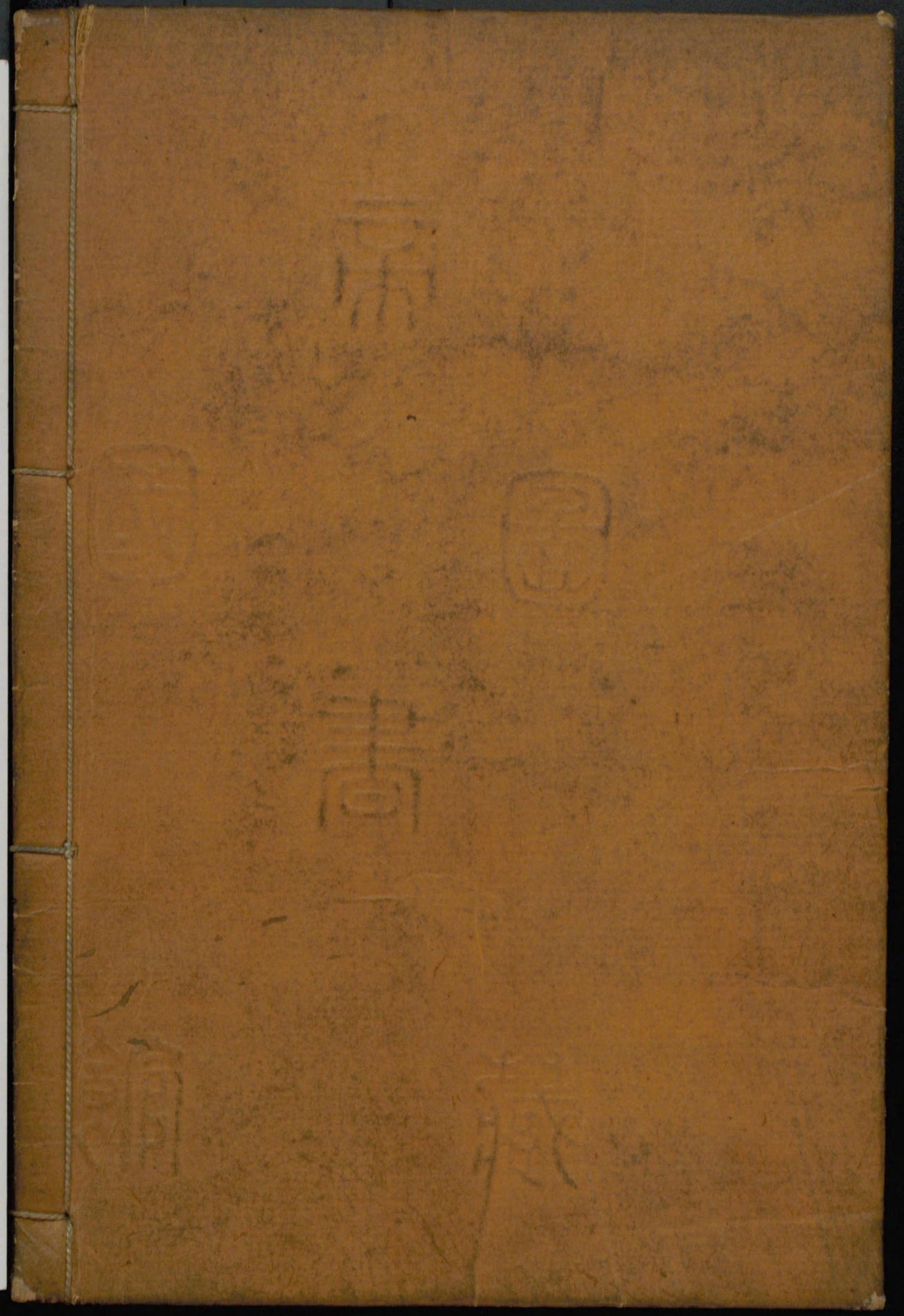
大正十四年三月三日印刷
大正十四年三月八日發行

定價金參圓

編輯兼發行者　東京市牛込區加賀町一ノ九　河東秉五郎

印刷者　東京市麹町區假田町四ノ一六　大島新

印刷所　東京市麹町區假田町四ノ一六　大島印刷所

發行所　東京市牛込區加賀町一ノ九　燕村研究會
振替東京一六〇二二番

158
121